

韓国の近代教育とキリスト教一宣教と近代思想の形成

徐正敏(Suh, Jeong Min, Ph.D.)

元韓国延世大学教授、現在日本明治学院大学教授

はじめに

韓国の近代化とキリスト教の受容は、中国と日本と比較すると遅れてはじまった。その理由の一つは、当時朝鮮政府の鎖国政策が原因である。したがって韓国カトリックは、長い間迫害を経験し、プロテスタントの宣教は 1880 年代にはじまる。韓国プロテスタントの初期宣教方法は、「トライアングルメソッド」(triangle method) である。これは「学校一病院一教会」を地域の宣教ステーションにセットとして設置し、運営したことを意味する。特にミッション系学校は、韓国近代の教育システムにおける基礎を形成した。しかし、1910 年日本による朝鮮半島の植民地化以降、韓国のキリスト教界の教育事業は、危機に直面した。私立学校令による宗教教育の禁止、神社参拝問題などがそれである。このような状況においてもキリスト教の教育活動は、韓国社会において近代思想、価値、倫理の形成に貢献してきたと考えられる。特に女性教育、身分と職業差別の撤廃、社会啓蒙などにおいては先駆者であったといえる。もっとも特別なことは、韓国の「近代民族主義」、つまり日本の植民地侵略に対する抗日民族独立運動の初期発出がキリスト教界の近代思想教育としての学校や社会教育団体に発端があることである。本発表では、プロテスタントに関する事柄に限り、韓国近代史における教育とキリスト教の関係について取り扱うことにする。

1、宣教の方法としての教育、「トライアングルメソッド」

韓国プロテスタントの最初の宣教師は、中国の上海において宣教活動を行い、1884 年に韓国に派遣された宣教師アレン (H. N. Allen) である。彼は医師として宣教師の資格をもって来韓し、病院と医療教育機関 (現在の延世大学校) を設立した。そして翌年、韓国に派遣された長老教のアンダーウッド (H. G. Underwood)、監理教のアペンゼラー (H. G. Appenzeller) らは、キリスト教の宣教師としての資格ではなく、韓国における教育活動という教師の身分によって許可を受けて、入国したのである。その背景は、1884 年 6 月日本に駐在した監理教宣教師マクレイ (R. S.

Maclay) が韓国に訪問し、国王高宗に韓国における教育と医療事業を可能にするようにとの許可を得たことに関係している¹。

これをみると韓国のプロテスタント宣教は、布教と教会設立より、まず医療と教育活動が中心にならざるを得ない状況であった。これに 1885 年に入国した宣教師の中で監理教のアペンゼラーは「培材学堂」、長老教のアンダーウッドは「アンダーウッド学堂」（後に倣新学校）を設立し、教育活動をはじめた。続いて 1886 年には最初の女性教育機関である梨花学堂も設立された。このように開始された韓国プロテスタントの宣教は、ソウル、平壤、大邱、元山、全州などのいくつかの中心都市、さまざまな教派が宣教を担当する地域の拠点であるステーションを開拓するとき、例外なく、学校、病院、そして教会という宣教機関を別途に、あるいは相互関係をもたせつつ設置・運営した。発表者はこれに「トライアングルメソッド」という名称をつけた。

このような初期の韓国宣教豊作の特徴を内外面一点ずつ挙げると、一つは形式的な「トライアングル方式 (Triangle Method) 」の使用である。これは宣教拠点ごとに病院、学校、教会が三角点をなして建てられ、相互有機的な宣教協力をとる方式である²

2、韓国近代教育の中心としてのキリスト教学校

このようなプロテスタント宣教部の宣教政策、韓国社会の近代教育に対する必要性の認識と要求にしたがってキリスト教の教育事業と学校設立は増加し続け、韓国近代教育の中心的役割を担うようになった。しかし 1910 年以後日本の韓国植民地統治以後、私立学校の教育についてさまざまな統制が起こり、特にキリスト教学校に対して宗教教育である近代思想教育の制限政策が一つの否定的状況として作用したのであった。

それにもかかわらず、少なくとも次の二つの統計を参考にすると日本の植民地化においても韓国の近代教育におけるキリスト教教育活動が占める割合がいかに大きかったかを確認することができる。

年度	一般私立学校	宗教系私立学校数	総計	宗教系学校の比率
1910	1,302	778	2,080	37%
1911	1,044	677	1,721	39%

¹ R. S. Maclay, "Korea's Permit to Christianity," The Missionary Review of the World, 1896. 4, pp. 289-290 参考。

² 徐正敏『韓国キリスト教史概論—その出会いと葛藤』かんよう出版、2012、21 頁。

年度	一般私立学校	宗教系私立学校数	総計	宗教系学校の比率
1912	817	545	1,362	40%
1913	796	487	1,283	38%
1914	769	473	1,242	39%
1915	704	450	1,154	39%
1916	624	421	1,045	40%
1917	518	350	868	40%
1918	461	317	778	41%
1919	444	298	742	40%
1920	410	279	689	40%
1921	356	279	635	44%
1922	352	262	614	43%
1923	376	273	649	42%

※表 1 1910—1923 年までの韓国私立学校中宗教系学校の比重³

教派	専門学校	中学校	小学校	幼稚園	日曜学校	私塾	計
カトリック		1	22	10	3	19	55
長老教	1	23	156	47	2,095	192	2,514
監理教	1	9	61	40	265	82	458
東洋宣教会					42		42
救世軍			18		96		114
聖公会			2	1	40	25	68
朝鮮基督教界			1		2		3
朝鮮会衆教会				2	14		16
日本基督教会					14		14
日本メソジスト教会				1			1
日本組合教会					5		5

³ 韓国基督教歴史学会編『韓国基督教の歴史2』（改訂版）基督教文社、2012、86 頁。比率は発表者の追加。宗教系学校は、そのほとんどがキリスト教系学校であった。

教派	専門学校	中学校	小学校	幼稚園	日曜学校	私塾	計
再臨教団		1	5			22	28
長監連合	2						2
総計	4	34	265	101	2,576	340	3,320

※表2 1925年12月現在キリスト教界教育機関数⁴

この統計において「日韓併合」以後キリスト教界の学校の数字が減少傾向にあるのは、朝鮮総督府当局が「私立学校令」などの法律を通してキリスト教学校の教育活動をはじめとする私立学校教育を制限したためである。しかし比率においては、韓国の近代教育分野においてキリスト教の役割はむしろ増加あるいは現状維持というような状態であったと確認できる。

3、キリスト教教育と近代思想の拡散

近代以前の朝鮮は、徹底した専制封建社会であった。特に身分、男女、職業の差別が非常に強い社会であった。これは東アジアの他のどの国家より、その程度が甚だひどい状態にあり、特にそれと同様に社会的要素により個人の人権が徹底的に蹂躪される社会であった。

これに韓国のキリスト教はカトリックとプロテスタントを問わず、宣教以来この問題と衝突する過程を経なければならなかった。特に「血の歴史」と呼ばれる激しい迫害を経験し、韓国カトリックの歴史は、伝統的に韓国社会の秩序について、革命的挑戦でもって認識され、葛藤が増大したのである。すなわち教会共同体の「身分」と「男女」区分を超越する信仰実践は、既存の国家社会の根幹を虚無にすることへと認識されるより他なかった。このような現象はプロテスタントの受容と共にさらに広がり具体化した。しかしキリスト教の近代的思想、価値観の広がりが実際に具現した通路としては、キリスト教学校、キリスト教系社会教育システムがその中心的役割を担ったのである。

第一に、男女差別を克服する近代思想実践の先導を行った。この部分においてもっとも重要な役割を担ったのがキリスト教の女性教育であり、女学校の設立である。プロテスタント宣教師たちはソウルをはじめ、各ステーションにおける「トライアングルメソッド」を実践する際に男子学校と共に必ず女学校をともに設立した。これは男女すべてに近代教育の機会を同様に与えるという形態的な差別撤廃だけでなく、これらの教育機関を通して女性に対しても神からの付与された同一の人間としての価値、権利があるという価値を教えた。しかし初期韓国社会において女性

⁴ 同上、87頁。

のための学校は、その基盤を作り上げる過程において多くの混乱と失敗、紆余曲折を経験しなければならないのは当然のことだった。

同じ頃女学校も設立された。1886年5月スクラントン夫人 (M. F. Scranton) によって始められた米監理会の梨花学堂と 1887年6月エラーズ (A. J. Ellers) によって開始されたきた長老会の貞洞女学堂がそれであった。培材学堂のように出世志向的な男性たちが集まり、できた男子学校とは異なり、女学校は女性たちの教育を忌み嫌う封建的な慣習のために学生募集においても容易ではなく、初期の学生らは孤児や娼婦、妾のような疎外された階層が大部分であった。⁵

しかしこのような過程を通して、韓国の近代女性史、すなわち女性たちも国家社会の各分野において重要な役割を担う位置、ときには指導的なリーダーシップを発揮する存在として成長することのできる実際の基盤が作り上げられたのである。ゆえに韓国近代女性史とキリスト教の分離することのできない関係が形成されたのである。

第二に、身分制度の打破において決定的な寄与を与えた。韓国の伝統社会は、両班、中人、平民、賤民などの徹底した身分制度が存在し、それが世襲した。したがって出身の身分を越えて社会的階層を形成することは原則的に閉じられていた。特に賤民の身分に生まれた場合、一生の間、人間として生きるという待遇を受けるということは、不可能な状態であった。しかしキリスト教は初期からその身分の区分を受け入れないことはもちろんのこと、人間としての最小限の人権も守られなかった賤民に対しても神が付与した同様の人権を備えている被造物であることを強調したのである。これを通して韓国近代史における身分制度の打破、ことに賤民解放史に積極的に寄与した。当時韓国社会の賤民は「白丁」と呼ばれる「アウトキャスト」 (Out Caste)⁶として、人間としての基本的な待遇も受けることができない状況であった。しかし初期韓国のプロテスタント宣教師であるエビソン (O. R. Avison)、モーア (S. F. Moore) などは「白丁」にも同様の教育機会を与え、教会内においても両班である貴族と同様に取り扱ったのである。⁷ 最初には

⁵ 韓国基督教歴史学会編『韓国基督教の歴史1』（改訂版）基督教文社、2011、150-151頁。

⁶ インドの Paraiyar あるいは日本の部落民に類似する階級。

⁷ エビソンが校長として在籍した最初のキリスト教医学校セブランス医学校の第1期卒業生の中には白丁出身の朴瑞陽が含まれる。彼は最初の外科医であり母校の教授になった。一方、モーア宣教師が牧会したソウルのゴンダンゴル教会に出席した白丁の朴晟春が長老に選任され、同じ教会

これによって韓国人の間に大きな違和感があったが、韓国近代史の賤民解放、身分差別打破の画期的基盤になった。

第三に、韓国社会のまた異なる差別は、従事する職業によっても厳格に上下関係の生じるものであった。すなわち、「士農工商」の順番が徹底しており、学問と文官に従事する大部分の「両班」、それに続き「農者之天下之大本」と言い、農業をその次に重要視したのである。しかし、さまざまなものを作り、製作する技術者として工業従事者、それよりさらに軽蔑されたのが商業従事者である「ジャンサチ」、「ジャンサクン」として蔑視され、社会においてもっとも低い職業として考えられた。これは近代化を妨げる深刻な問題でもあった。キリスト教は教会の内外においてこのような職業差別を否定し、克服するために力を尽くしたのである。代表的にキリスト教専門の高等教育過程における具体的な例において見ることができる。1915年ソウルに長老教、監理教の連合によってキリスト教系において最高水準の高等教育機関である「延禧専門学校（現、延世大学校）」が設立された。この学校の学部設置を見ると、文科、神科、農科などとともに商科、数物科が同じく設立された。これはもっとも冷遇を受けた商業分野を高等教育課程のひとつとして設置し、職業分野によって差別撤廃の先頭に立ったと言える。⁸ それ以前に平壤のキリスト教学校である崇実学校などを中心にすでに教科過程の中に「実業教育」を積極的に実施する社会的雰囲気をもたらし、多くの事例⁹を挙げることも可能である。

第四に、韓国キリスト教は、学校内の教育はもちろん社会啓蒙教育を通して、新たな倫理実践、節制、禁欲の価値を具現してきた。つまり、韓国プロテスタント・キリスト教は宣教初期からアヘン、酒、たばこ、妾、賭博などを禁止する個人倫理をキリスト教の准教理水準として強調した。このような伝統は現在の韓国キリスト教にも一部の伝統として残っている。これとともにキリスト教界の学校とYMCA、YWCAのような青年社会団体は社会啓蒙活動に率先して、近代思想、価値の普及はもちろん、具体的な盲目退治運動、個人衛生啓蒙と伝染病予防、農村地域運動などなどのさまざまな部門の啓蒙事業にも力を注いだ。¹⁰

4. 日本の植民地教育とキリスト教教育との葛藤

の両班たちの反対により騒動が起こり、ついには教会が分裂することもあった。朴晟春は、朴瑞陽の父親である。

⁸ 延世の発展と韓国社会編纂委員会編『延世の発展と韓国社会』延世大学出版部、2005。

⁹ 崇実大学校100年史編纂委員会編『崇実大学校100年史』崇実大学校出版部、1997参照。

¹⁰ 金興洙・徐正敏『韓国基督教史の探求』大韓基督教書会、2011、62-68頁参照。

韓国の初期キリスト教学校と社会教育システムが韓国の社会に及ぼした影響の中でもっとも特筆しなければならないテーマは「近代民族主義」¹¹の拡散である。つまり初期韓国キリスト教の教育は、帝国主義の侵略と植民地状況下において、民族的アイデンティティを自覚する契機を提供した。このような韓国キリスト教の民族主義との連結は独特なケースである。すなわち大部分の西欧帝国主義による植民地支配の経験、そしてそれらの植民地侵略国家からキリスト教を受容した異なるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ地域の例とは全く異なる歴史的経験であった。何より韓国において初期、キリスト教を受容したエリートキリスト者の動機は、キリスト教の近代文明的価値とキリスト教の宣教国家の政治外交的な力に頼って自国の独立する力量を向上させることに焦点を置いていた。そして一部米国中心のキリスト教宣教師たちも同一のアジアの国家であり、非キリスト教国家である日本の植民地侵略の前に置かれた韓国人たちの独立熱に対して積極的に協力することもあった。このような状況において韓国のキリスト教学校と教育プログラムは民族主義イデオロギーの認識と拡散が可能なおもっとも重要な通路となったのである。

代表的な例のみを挙げるとソウルにおいて形成された「尚洞派」¹²が運営した「尚洞青年学院」、平安北道の定州の五山学校¹³はキリスト教教育機関であると同時に韓国近代民族主義の教育の中心であった。これ以外にも直接キリスト教宣教師たちが設立し運営したミッションスクールの学生と教師たちを中心に韓国民族独立運動における拡散の基地の役割を担った。その代表的な事例が1919年の植民地下の韓国で生じたもっとも代表的な独立運動である3・1独立運動当時のキリスト教学校と病院の貢献である。その結果、3・1独立運動によってとりわけキリスト者の犠牲が多かった。統計から分かるように無宗教者をはじめとする全体の収監者を見ると朝鮮総督府の統計は9,059名の全体の中でキリスト者が2,036名(22.5%)、日本憲兵隊の調査による他の

¹¹本発表において発表者が設定した「近代民族主義」の概念は、主に近代帝国主義の時代以後「帝国主義」と闘争した実践的なイデオロギーとしての「民族主義」を意味する。つまり強大国による植民地支配に抵抗し、被圧迫民族としてのアイデンティティを確立し、独立民族国家を志向する政治的、社会的イデオロギーを意味する。ただし統一した近代以後の民族主義の流れの中でも、極右のファシズムと連結する「攻撃的民族主義」(Offensive Nationalism)があり、その一方として弱者としての独立を追求した「守備的民族主義」(Defensive Nationalism)を区別することができ、先の概念は後者の「守備的民族主義」を指す。発表者ブログ <http://blog.naver.com/chhistory12/150155381136> を参照。

¹²ソウルの尚洞監理教会と宣教師スクラントン(W. B. Scranton)、韓国人牧師の全德基を中心に形成した平信徒の独立運動家グループである。金九、李東寧、李承晩、李東輝などなど初期韓国独立運動家がすべて網羅されたキリスト教界の民族運動グループである。

¹³キリスト者である李昇薫が宣教師の援助を受け設立したキリスト教系民族教育機関である。

資料で検挙された者は、全体で 20,521 名中、キリスト者は 4,426 名 (21.5%) である。これを宗教者だけに限定してみるならば総督府の集計ではキリスト者が 56.9%、憲兵隊統計ではキリスト者が 60.5%に至る。¹⁴ 当時韓国のキリスト者は、韓国人全体の 2-3%程度であったため比率を見ると驚くべき結果を示している。それ以外にも水原の堤岩里教会をはじめ全国のいくつかの教会が放火、集団虐殺、被害を受けた。これは韓国の民族独立運動の主導勢力がキリスト者であることを日本帝国の当局も把握していた結果でもある。

日本の植民地統治勢力は、このような韓国キリスト教の民族意識拡散の役割を把握しており、特にその中心にキリスト教学校とその教育課程が重要な焦点であることも把握されていた。これに初期から韓国キリスト教教育は、日本帝国当局の監視と規制の対象であった。これに具体的な各種教育関連の法令によりキリスト教学校を制限したのであった。

キリスト教系私立学校における教育は民族的反日的な性向が濃い。このため日帝は私立学校に対する統制、監督を強化する目的で 1915 年「(改定) 私立学校規則」を交付し、学校における宗教儀式と宗教教育を禁止させ、日本語で教えるように強要した。このような日帝の弾圧によって 1910 年頃 829 を開校していた宗教系私立学校が 1918 年 12 月には 323 の開校、1919 年 5 月には 298 の開校のみになった。¹⁵

その後も日本帝国当局の韓国キリスト教、特にキリスト教系学校に対する警戒と弾圧は持続していた。

1908 年統監府時期の私立学校令、1911 年朝鮮教育令と私立学校規則中の宗教教育の制限、1915 年の布教規則とキリスト教布教機関の統制令、1915 年の改正私立学校規則が代表的である。つづいて 1920 年の改正布教規則、同じ 1920 年と 1922 年の改正私立学校規則等を追加することができる。¹⁶

これは日本帝国が持続的にキリスト教学校教育に制限政策を行ったことを意味する。しかし、日本帝国下においてもっとも深刻であったキリスト教学校の危機は、「神社参拝の強要問題」であった。神社参拝を植民地朝鮮まで強要するようになった背景は、徹底した「日本化」政策の一

¹⁴ 『韓国基督教の歴史 2』(改訂版)、2012、45 頁参照。

¹⁵ 前掲書、29-30 頁。

¹⁶ 徐正敏、「1945 年前後の韓国キリスト教の受難-信仰と良心の圧制に対する抵抗、そして屈折と懺悔の問題-」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』、第 48 号、2016、2、240 頁。

環であった。「内鮮一体」と呼ばれる植民地施策を通して、朝鮮全体を戦争を行う兵站基地として活用する目的が強力であった。それゆえに日本の国民統合の一つの方策である国家神道の参拝、天皇制イデオロギーに対する崇拝を植民地朝鮮にも強要する必要があったのである。

しかし、この問題は比較的保守的な韓国のキリスト教である長老教宣教師たちと敬虔主義信仰に徹底したキリスト者には信仰的抑圧、偶像崇拝の強要として認識されたのである。この問題がもっとも具体的な葛藤として現れたのが、主に長老教系の宣教師が運営に参加したキリスト教学校の神社参拝の強制においてである。

日帝が神社参拝拒否を理由にキリスト教系学校に対して直接制裁したのが「平壤キリスト教系私立学校長神社参拝拒否事件」である。1935年11月平安南道道廳において開かれた道内の公・私立中等学校校長会のはじめに道知事が校長たちに平壤神社参拝を要求した。しかし、平壤の崇実学校校長マッキューン (G. S. McCune)、崇義女学校校長代理の鄭益成、順安の義名学校校長リー (H. M. Lee) などはこれを拒否し問題に火がついた。これに総督府と道当局は、校長および学生の参拝状況まで明確に回答するように要求し、その結果にしたがって校長罷免および閉校も辞さないという強硬な方針を発表した。¹⁷

以後、神社参拝問題は、韓国キリスト教学校の存廃与否を決定する重要な鍵となった。おおよそカトリック、プロテスタントのなかで監理教系学校は神社参拝を受容し、学校を存置させる方向を選択した。しかし大部分の長老教系統の学校は、宣教師たちが学校経営から退き、一旦は学校を閉めるという選択をした。ただソウル中心のいくつかの長老教系の学校など一部は学校の存立を優先した事例もある。しかし時期の問題であり、日本帝国末期のファシズム絶頂期には、すべて西欧出身の宣教師たちが韓国から追放された状況であったために、これ以上この問題は学校運営の鍵になることはできなかった。

しかし神社参拝の強要について長老教系の宣教師たちの反発、学校の廃校、保守的信仰を堅持した韓国キリスト者の一部の殉教的抵抗は事実前述した抗日民族主義の発露であったといえる。むしろ民族主義の実践や政治的動機よりは、信仰的動機、純粋なキリスト教の敬虔を守ろうとする信仰的抵抗が主たる理由であった。ただし、それが外から見ると、日本帝国当局の政策に対して強力な抗拒になるため日本帝国下の抗日アイデンティティーの最後の表現になった。しかし、これはまた少数の抵抗に終わり、多数のキリスト教学校、そしてキリスト者は日本帝国の強

¹⁷ 朝鮮総督府『(極秘)平壤における外国人私立中等学校長の神社不参拝経緯概要』、1936 (『韓国基督教歴史2』(改訂版)、2012、261-262頁、再引用)

力な圧制の前に屈従し、神社参拝を容認し、天皇制イデオロギーに順応するより他なかったの
ある。